

へたから、日經は席に列したが言ふこと能はず、遂に法問に敗れたとの裁決を興へられた。日經は未だ問答せずして勝敗のあるべき理由なく、此くの如き裁決は、大不理不盡惡賊の國主にあらざれば爲さざる所であると譏諷した。依つて翌年京都に護送せられ、二月二十日六條河原に於いて耳と鼻とを削がれた。是より日經の意氣益軒昂、これ祖師横難の遺跡を繼ぐものであると揚言した。しかもその足を留める所直に逐はれたので、若狹・越前を経て加賀に入らんとしたが、前田利常の臣三輪志摩長好之を途に見、伴ひ歸つて金澤の妙法寺に置き、又爲に一寺を創立して本覺寺と號した。既にして幕府が日經の踪跡を追窮すること甚だ嚴であつたから、長好は累を藩に及ぼさんことを恐れ、日經に諭して去らしめた。日經乃ち越中に入り、藩臣村隼人の歸依を受け、富山に正顯寺を起し、後城外數里の山村に隠れ、世職七十を以て寂した。或は日經が本覺寺に寂したとも傳へる。

ニツキヨウ 日京 日蓮宗の僧。羽咋郡妙成寺三十七代の住持。遠令院と稱し、天保三年八月廿一日越後で遷化した。

ニツキヨウ 日岐 日蓮宗の僧。字は惠光、惠光院と稱した。山城の人。初め尾張法輪寺の中心院日定に師事し、山科檀林に學んで直に玄義を講じた。次いで肥前大村本教寺に住み、辭して身延山日裕の門人となり、飯高檀林に遊んで業成り、文句を山科の護國講寺に講じ、備後の山田常國寺に住み、又妙雲山の請に應じて衆を領した。享保十七年羽咋郡妙成寺に入山、その廿五代を嗣法し、享保廿一年三月廿八日寂した。

ニツキヨウ 日寛 日蓮宗の僧。字は實等、誠峯院と稱し、伊豫松山の人である。初め城州山科護國講寺に學び、後身延山日裕の門人となり、妙雲山に學んで直に玄義を講じ、又文句を山科檀林に講じ、次いで甲州信隆寺に住み、次に京都妙傳寺に貫頂した。享保十五年羽咋郡妙成寺に入山してその廿四代を嗣法し、十七年身延山に轉住して三十五代となり、十九年正月廿一日寂した。

ニツキン 日均 日蓮宗の僧。羽咋郡妙成寺四十四代に居り、字は仙珠、潤照院と稱し、安政五年十一月廿六日遷化した。

ニツサン 日山 日蓮宗の僧。羽咋郡妙成寺四十七代の住持。歡如院と稱し、明治四年六月廿六日遷化した。

ニツシ 日至 日蓮宗の僧。本照坊と號する。本行院日海の門下。元和三年師と共に金澤に下つて本行寺を建て、その開祖となつた。明暦二年四月十二日遷化。

ニツシユウ 日收 日蓮宗の僧。字は秋潤、智勇院・一鶴・睡心病叟・古川子と號した。能登の人。京都松崎談林・下野飯高談林に學び、心性院日遠の教を受け、次いで安國院日奥に迎へられ、妙國寺に内外の書を講じ、元和六年肥後に下つて常光寺に住し、國主加藤忠廣の厚遇を得た。慶安三年十月十七日七十二歳で寂。

ニツシユウ 日修 日蓮宗の僧。金澤靜明寺八代の住持。稱善院。延享二年八月八日八十一歳寂。同寺に『説法五千座成就、日修花押』の碑がある。

ニツシユウ 日舜 日蓮宗の僧。羽咋郡妙成寺九代の住持。その傳を失ふ。

ニツシユン 日春 日蓮宗の僧。字は是然、後秀感、中道院と號し、俗姓は清水氏。元和八年二月十六日金澤に生まれた。八歳の時本學山蓮覺寺主日諱に投じて出家、十六歳中村談林に入り、三十八歳鷗冠井談林の講主となり、尋いで松崎談林に進み、寛文五年四十四歳を以て京都妙顯寺に上り、四海唱導師の重任を受けること十七年、後席を法弟日空に譲つて退隱し、元祿十五年正月廿五日八十一歳を以て寂した。

ニツシユン 日俊 日蓮宗の僧。修禪院と稱し、越中永見の人。羽咋郡妙成寺日條の門より出で、正東山に學び、萬治三年妙成寺十八代に住し、長屋及び黒門を建て、一切經堂を私造し、又文句を中林談林に講ずること六年に及んだ。延寶三年六月藩士九里覺右衛門の母が死亡した時、妙成寺が且那寺であつたから、金澤に來つて殯儀を營まんことを求めたが、日俊は遺骸を瀧谷に送附すべく主張した。然るに時正に夏季に當つたので、覺右衛門は金澤蓮心寺の住持妙源院を導師とし歿葬を終へた。是を以て爾後兩寺間に葛藤を生じ、互に讒訴する所あつたが、五年事落着し、日俊を上口に、妙源院を下口に追放し、而して蓮心寺は破却を命ぜられた。但し妙成寺の寺傳には日俊が山内慶住坊に退隱し、天和三年正月二日示寂したとしてゐる。

ニツシヨウ 日詳 日蓮宗の僧。金澤慈雲寺八代の住持で、連歌を好んだ。同寺標塔に貞享五年日詳代と記したものがあつた。

ニツシヨウ 日昶 日蓮宗の僧。羽咋郡妙成寺四十三代に居り、泰善院と稱し、安政三年一月十六日六十五歳で遷化した。

ニツセン 日詮 日蓮宗の僧。河北郡車なる寶乘寺九代に居り、壽量院と號し、讀經一萬部に及んだ。明應九年三月四日八十一歳で寂。

ニツセン 日扇 日蓮宗の僧。羽咋郡妙成寺四十二代に居り、動樹院といひ、文久三年六月廿九日遷化した。

ニツソウ 日相 日蓮宗の尼。金澤の人。久津見氏、俗名重。日審の京都より北地に飛錫した時初めて教を受けた。寛永十七年その母出で、將軍徳川家光に仕へ、十九年重十六歳にして前田利常の女の八條宮智忠親王に嫁するに從うた。既にして母老いたるを以て、重は致仕して之を省し、後身延山日境によつて得度し、妙是院日相と稱したが、母の歿後將軍家綱はその祿の半を日相に興へたから、日相は竹露庵を建て、之に居り、又母の爲に妙應寺を營み、次いで竹露庵を谷中日慶尼寺の址に移して日慶寺と號した。寶永二年十月その寂する時年七十九。

ニツソン 日存 日蓮宗の僧。羽咋郡妙成寺六代に住し、又能州別所谷の成隆寺及び後に金澤に移つた圓光寺を開いた。寺傳に曆應元年三月十七日寂とする。

ニツタイ 日泰 日泰又日臺に作る。何處の人なるを知らぬ。古事談に曰く、白山權現の住み給ふ山に池がある。御在所を距ること三十六町、深山中に在つて縦横七八段許、號して御厨池といふ。龍王相集つてこゝに供養を備へるが故に、人の近づくを許さぬ。若しその傍に至るものがあれば、雷電忽ち起つて爲に害せられる。たゞ淨藏と最澄とのみ、曾て權現に乞うてこの池水を汲んだことがある

ニツシユン 日春 日蓮宗の僧。字は是然、後秀感、中道院と號し、俗姓は清水氏。元和八年二月十六日金澤に生まれた。八歳の時本學山蓮覺寺主日諱に投じて出家、十六歳中村談林に入り、三十八歳鷗冠井談林の講主となり、尋いで松崎談林に進み、寛文五年四十四歳を以て京都妙顯寺に上り、四海唱導師の重任を受けること十七年、後席を法弟日空に譲つて退隱し、元祿十五年正月廿五日八十一歳を以て寂した。

ニツシユン 日俊 日蓮宗の僧。修禪院と稱し、越中永見の人。羽咋郡妙成寺日條の門より出で、正東山に學び、萬治三年妙成寺十八代に住し、長屋及び黒門を建て、一切經堂を私造し、又文句を中林談林に講ずること六年に及んだ。延寶三年六月藩士九里覺右衛門の母が死亡した時、妙成寺が且那寺であつたから、金澤に來つて殯儀を營まんことを求めたが、日俊は遺骸を瀧谷に送附すべく主張した。然るに時正に夏季に當つたので、覺右衛門は金澤蓮心寺の住持妙源院を導師とし歿葬を終へた。是を以て爾後兩寺間に葛藤を生じ、互に讒訴する所あつたが、五年事落着し、日俊を上口に、妙源院を下口に追放し、而して蓮心寺は破却を命ぜられた。但し妙成寺の寺傳には日俊が山内慶住坊に退隱し、天和三年正月二日示寂したとしてゐる。

ニツシヨウ 日詳 日蓮宗の僧。金澤慈雲寺八代の住持で、連歌を好んだ。同寺標塔に貞享五年日詳代と記したものがあつた。

ニツシヨウ 日昶 日蓮宗の僧。羽咋郡妙成寺四十三代に居り、泰善院と稱し、安政三年一月十六日六十五歳で遷化した。